

MIYAKAWA Hiro's Children's Literature and Education
Interview with MIYAKAWA Takeo

NAKACHI Aya and OKI Yoko

要 旨

本稿は、児童文学を活用した教員養成プログラムの開発をめぐる共同研究の一部である。小学校を舞台として子どもの行動や心理を描くことが多い宮川ひろの児童文学作品の創作背景・創作方法をめぐって、遺品や著作権の管理をしているご子息の宮川健郎氏にインタビューし、宮川ひろの児童文学が現職教員の実践記録や子どもの作文などを素材としながら生み出されたことを確認した。また、具体的なエピソードを重視する姿勢、「学校」を「村」と捉える独自の認識が見えてきた。

Key words : 教員養成、児童文学、宮川ひろ

(令和2年9月30日受理)

宮川ひろの児童文学と教育

—宮川健郎氏に聞く—

はじめに

本稿は、児童文学を活用した教員養成プログラムの開発をめぐる共同研究の一部である。この研究は、教科の区分を超えて初等教育教員の専門性を培う教員養成の授業提案は少ないという問題意識のもと、児童文学をテキストとした子ども理解、教職理解の学修プログラムを開発・提案しようと考えて開始したものである。現代児童文学の多くは、子どもを主人公とし、子どもをめぐる問題や子どもの成長を描いている。また、児童文学には、いじめや不登校、特別な支援を必要とする子どもの問題、被災・防災の問題など、近年の学校現場で課題となっている事柄を子どもの側に焦点を当てて描き出した作品も少なくない。フィクションとはいえ文学は現実を映し出すものであり、読書は直接体験を補う間接体験・疑似体験であると言われていることを踏まえると、適切な児童文学を教材とする教員養成プログラムがあれば、教員を志望する学生は子どもや教育課題と向き合う間接体験・疑似体験を体系的に積み上げることができるだろう。そして、子どもの行動や心理に対して、教員の在り方に対して、また教育課題に対して、理解を深めることができるだろう。このような考えから、この共同研究では、初等教育教員養成に資する児童文学作品の調査・検討を行ってきた。本稿で焦点を当てる宮川ひろは、教員養成プログラムに活用できると考えている作品の作者である。

宮川ひろ（一九二二〜二〇一八）は、デビュー作の『るすばん先生』（一九六九年 ポプラ社）、代表作の『四年三組のはた』（一九七五年 偕成社）、『先生のつうしんぼ』（一九七六年 偕成社）をはじめとして、小学校を舞台とする児童文学作品を数多く発表し、先生や子どもを描き続けてきた。

* 中 地
* 大 木 葉
* 子 文

その作品には、児童の問題行動や不登校のほか、保護者側の学校への要求や教員夫婦の家事分担の問題など、教育や教職をめぐる様々な問題も織り込まれている。本稿では、このような《学校もの》が生み出された背景を確認する。宮川ひろと学校現場との関わり、教育や子どもに関する情報収集の手段を確認し、『学校もの』の創作方法を把握することで、宮川ひろの児童文学の特徴がより明確になり、その成果は教員養成教育での有効な活用へとつながると思われるからである。確認の方法として、今回は、宮川ひろの遺品や著作権の管理をしている宮川健郎氏（宮川ひろのご子息、一九五五〜）に伝記的事実や思い出、遺品からわかることなどをお伺いし、その内容をまとめることにする。共同研究にご協力くださり、貴重な情報を提供してくださった宮川健郎氏とご家族のご厚意によって本稿は成り立っていることを、初めに明記しておく。

一 宮川ひろの創作背景の確認方法をめぐって

宮川ひろの《学校もの》の創作背景・創作方法等を確認するにあたり、本稿ではご家族から直接話を伺うという方法をとるが、そのほかにも次の三つの方法が考えられる。

一つは、宮川ひろ自身が経歴や自作に関することを語っているインタビューやエッセイから情報を整理してまとめるという方法である。インタビューには、日本児童文学者協会編『作家が語る わたしの児童文学15人』（二〇〇二年 につけん教育出版社）

* 国語教育講座
** 東北工業大学准教授

に収録されている「『春駒のうた』の宮川ひろさん(談)」(初出は『日本児童文学』二〇〇〇年八月、同一〇月)があり、産休補助教員としての体験が反映されているという『るすばん先生』の創作背景などが語られている。エッセイは、雑誌・新聞に発表されたものが相当数あり、主要なものにはエッセイ集『母からゆずられた前かけ』(一九九三年 文溪堂)、『あて名のない手紙』(二〇〇七年 メディアパル)に収録されているが、生い立ちや体験、自作に関する記述は多いように見受けられる。「『先生のつうしんぼ』と戸田先生」(『赤旗』一九八三年二月六日)、『母からゆずられた前かけ』所収や、「『天使のいる教室』をめぐって」(『児童文芸』一九九七年二月)、『あて名のない手紙』所収)など、『学校もの』の創作背景について詳しく記されているものもある。

二つめは、宮川ひろの教え子や、交流のあった人々、素材提供者等から話を伺う方法である。素材に関しては作品のあとがきやエッセイに丁寧に記載されている。教え子や交流のあった人を特定するには、勤務校や講演を行った団体等の調査をするとともに、書簡の確認などご家族の協力も必要となるが、現時点ではこうした聞き取り調査は可能であろう。ご家族とは異なる視点から、宮川ひろの行動や考え方、作品の背景が語られるのではないかと思われる。

三つめの方法は、作品のあとがきに記された発想や素材に関する情報を取りまとめるとともに、実際に素材を確認し、素材と作品との関係を検証することである。たとえば、『先生のつうしんぼ』の「あとがき」には「戸田唯巳先生のエッセー『先生、うんまくやったね』を拝見しました」(一九七六年七月発行の初版9刷より)と記されている。これは、日本作文の会編『作文と教育』二五巻二号(一九七四年二月)に掲載された戸田唯巳「教育の真実を求めて―子どもと教師の魂のふれあい(10)先生、うまくやるね」を読んだということであろう。宮川ひろは、この文章をどのように作品に活かしたのか。素材と作品の共通点と相違点、そこから浮かび上がることを検討すれば、創作方法の一面が見えてくるに違いない。

以上のように、宮川ひろの『学校もの』の創作背景・創作方法等を確認する方法はいくつかあり、当然これらの方法は併用していく必要があると思わ

れるが、今回は宮川健郎氏がインタビューを快諾してくださったことから、その貴重な機会をまずは活かすことにした。宮川健郎氏は、宮川ひろの長男で、兄弟姉妹はなく、宮川ひろの人生と創作姿勢について文献からは探り得ないことを伺うことのできる唯一の人物といえる。また、宮川健郎氏は、現在、一般財団法人・大阪国際児童文学振興財団理事長、武蔵野大学名誉教授であり、『国語教育と現代児童文学のあいだ』(一九九三年 日本書籍)、『現代児童文学の語るもの』(一九九六年 日本放送出版協会)、『物語もつと深読み教室』(二〇一三年 岩波書店)などの著書を持つ児童文学の研究者・評論家でもある。加えて、大学の教育学部で長く教授を務めたこともあって、教育関係の研究団体や研究文献にも詳しい。今回の共同研究の問題設定を理解したうえで、回答が期待できるうえ、宮川ひろの『学校もの』の特徴に関する解釈も伺うことができるだろう。インタビューを行うにあたっては、二〇一九年六月に宮川健郎氏が発表した次のような見解(「宮川ひろという人」、『子どもの本棚』六〇八号)についても、より詳しく伺いたいと考えた。

宮川ひろは、リアリズムの作家だから、ふるさとの体験、戦争体験、学校や教室での体験を素材に書いていった。ただ、その作品には、体験を見直す視点が織り込まれていたと思う。

今回のインタビューの質問内容は、宮川ひろの児童文学と教育との関わりの部分に焦点化し、これまでに発表されている宮川ひろ自身へのインタビューやエッセイからは十分に確認が得られない情報を主に伺うことにした。宮川ひろと学校教育とのつながりに関しては、教職についていた時期や担当学年等を具体的に確認する。また、『学校もの』とされる作品の創作をめぐっては、素材をどのようにして得ていたのか具体的に伺い、取材の有無、テーマへの意識のありよう等を明らかにする。さらに、教育関係資料の収集方法や、蔵書、購読雑誌等に関する情報も得られればと思っている。質問を作成する際には、作品のあとがき等の記述を踏まえるようにした。質問は、伝記的事実の確認からはじめ、最後に宮川ひろの児童文学の特徴に関する宮川健郎氏の見解を伺うという流れで構成する。インタビューの前に、主な質問を宮川健郎氏にお送りし、事前にご検討いただいた。

二〇二〇年九月二六日(土)、東京・国分寺の宮川健郎氏のご自宅の、宮

川ひろが生前に応接間として使っていたという部屋にて、宮川健郎氏のお話を伺うことができた。本稿執筆者のうち、インタビュアーは中地が担当した。以下(本稿「二」～「五」)は、その時に伺った話を整理してまとめたものである。宮川氏の話は、本稿執筆者が文章化し、宮川氏にも内容を確認していただいた。内容を正確かつ明確に記録することを重視したため、文章は平板なものとなっている。実際の宮川氏の語り口を再現したものではないこと、話を整理した際に多少順序を入れ替えたり省略したりした部分もあることをお断りしておく。

なお、今回、教育にかかわることに絞って話をまとめたため、宮川ひろの人となりや活動、創作とその手法に関する貴重な情報であるにもかかわらず省略せざるを得ないものがあった。児童文学者との交流についても省略した。これらは稿を改めてまとめたいと思う。

二 宮川ひろの教職経験

—— 未発表年譜、宮川健郎編「宮川ひろ年譜」(一九八九年二月二八日付)があるのですね。

この年譜は、一九八九年かそれより少し前に、偕成社から宮川ひろ全集を出すという話があつて、その際にまず年譜を作つてと僕が編集者に依頼され、母から話を聞いて作りました。手書きの原稿を編集者に渡し、それを編集者がデータ化してくれました。それが手元にあります。全集の刊行は、結局実現しなかったのですが。

その編集者というのは、偕成社編集長の相原法則さんから仕事を託されていた編集プロダクション「恒人社」の代表の伊藤英治さんです。伊藤さんは、もう亡くなりましたが、『まど・みちお全詩集』(一九九二年 理論社)などの編集でよく知られていた方です。

その後に作成した「宮川ひろ年譜・補遺」(一九九四年四月二三日付、一九九九年二月二四日増補)は、僕がワープロで打ちました。

—— 宮川ひろの作品には、ご自身の体験が反映しているように思われます。教職についていた時期を確認させてください。

まず、一七歳の時に、母校の群馬県利根郡東村小学校に代用教員として赴任しています。同小学校の平川分教場に一年弱勤め、本校に異動して退職。正教員ではありませんから、必要な時だけ頼まれて勤めていたのでしょう。その後、東京に出て、兄の家に寄宿して一時期幼稚園にも勤務しています。働きながら、尋常小学校本科正教員検定試験を受験し、単位を集めて、一九四二年七月に正教員の免許状を取得しました。

免許状を取得した後、半年ほど再び平川分教場で教鞭をとっています。正式に就職した先は、蒲田区の東京市出雲国民学校です。一九四三年の四月に着任しました。この学校に勤めていた時に、学童疎開の引率をします。『夜のかげぼうし』(一九七八年 講談社)、『東京へ帰る日まで』(一九八五年 講談社)は、その体験をもとにした作品です。

戦後、一九四六年の三月末に出雲国民学校は廃校となります。四月に、京橋区の明石国民学校に赴任、一九五〇年一月に結婚退職するまでここに勤めていました。

—— 戦中戦後の大変な時代に教員をなさっていたのですね。

そうですが、戦後は非常に解放感があつて楽しかったと聞いています。民主教育時代で、教室が足りなくて二部授業をしていたようです。

—— 年譜によると、一九六八年の九月から十二月に板橋区立三園小学校で産休補助教員を務められたということですが、ご結婚後に教壇に立ったのはこの時だけですか。

そうです。この前後に学校事務を数年していたと思いますが、教員として勤めたのはこれだけです。

—— 年譜には、一九六三年に「子どもをめぐる文化教室」に参加して坪田譲治と出会い、一九六四年に児童文学の創作を始められたとあります。そうすると、創作開始後に教員として勤めたのは、この四カ月だけということですね。教員時代の担当学年などについては聞いていらっしゃいますか。

担当学年は正確にはわかりません。ただ、戦後の時期には一年生も六年生も担当したことはあるようです。六年生については、戦後のまだ公立中学が整っていないかった時期に青山学院とか私立に進学させたという話がありましたから、確かでしょう。

出雲国民学校在職時に一緒に疎開した教え子とは、後年交流がありました。古稀を迎えた教え子が数人、この家に訪ねてきました。母が八〇歳くらいの時だったと思います。そのほか、国語教育で活躍している知り合いに、母の教え子の娘という人がいますから、教員時代の母についての話を聞くことはできるかもしれません。

——一九六八年に産休補助教員をしたときの担当学年は、『るすばん先生』（一九六九年 ポプラ社）の設定どおりに三年生だったのでしょうか。

『るすばん先生』の設定は、わりと体験通りだろうと思います。長く教職を離れていて、母親の立場で学校を見ていましたから、ある種、学校現場への再デビューとなり、いろいろと考えるヒントを得られたのでしよう。

三 《学校もの》の創作方法

——『るすばん先生』は体験にもとづく部分があるようですが、体験以外から材を得ることもあったのでしょうか。

自分の体験だけではエピソードが足りないのです、いろいろな人から話をもらって作品を作っていました。母が人と話をしている時、見ているとわかります。これは作品に書くなつて。そういう時には顔つきが変わります。「それは何なの」などと質問もはじめて、話にくいついていきます。そして、作品に必要な分を聞きとってしまうと、普通に戻ります。

——メモを取りながら話を聞くのでしょうか。

メモは取りません。話している人から見ると、ただ聞いていただけに見えたと思います。質問もしながら熱心に聞くので、話す人は、ひろさんはよく話を聞いてくれると感じていたようです。

——そのような場面をご覧になったというのですが、どこでご覧になったのでしょうか。教育関係の研究会などの場で人の話を聞くのでしょうか。

そうではなく、家に来客があったときとか、日常の場面です。話し手は、近所の人ということもありました。日常の中でもらった話を作品に取り入れていました。これは書けるというアンテナがあるようです。

教育に関する話をまとめて提供してくれる人も何人かいました。『天使のいる教室』（一九九六年 童心社）の「サトパン先生」、佐藤静子先生もその一人です。『四年三組のはたの「あとがき」』に記された「若い先生の目でもとらえた教室のこと、子どものことを、いつもはなしてくださる西蓮寺美紀さん」は、杉並区だったか、ある家庭文庫を手伝っていた先生で、その文庫で知り合ったのだったかと思えます。僕より少し年上の当時本当に若い先生でした。

——佐藤静子先生については、エッセイ「『天使のいる教室』をめぐる」の中で、「『日本文学教育連盟』で活躍の渡辺増治先生からのご紹介」とあります。日本文学教育連盟との関係はどのようなものだったのでしょうか。

母が所属していた団体は、日本児童文学者協会、日本民話の会、子どもの本研究会などです。教育関係の団体には所属していません。日本文学教育連盟は会員ではありませんでしたけれども、講演などによく行っていました。教育関係の団体の中では繋がりが深いところだったと思います。講演を通して知り合った人は少なからずいました。知り合いになった人との交流は、手紙のやり取りが主です。毎日数通の手紙を書いていました。電話で毎日のように話をしていたのは、同人雑誌『どうわ教室』（一九六六年四月創刊）で一緒にして以来の友だちのあまみきみこさんですが、晩年、あまり動けなくなつてからは、いろいろな人との電話も多くなりましたね。

——ご自身の体験のほかに、人から聞いた話を素材とし、それに肉付けして作品を作っているということがよくわかりました。では、作品に登場する学校や子どもの遊び場など、作品の舞台については、実際に特定の場所取材して書くということもなさっていたのでしょうか。『先生のつうしんぼ』で、吾郎と伸一が遊びに行く「荒川土手のむこう」の風景など、具体的ですが。

作品を書く際に見に行くということはなかったと思います。素材が集まったら書けるので、素材を集めながら見たことを書いています。空間感覚はある方で、記憶力がものすごくよいので、記憶しているのでしょうか。また、人の話を聞く時には、具体的なことを確かめながら聞いていました。根掘り葉掘り聞いていたという感じがします。描写が具体的なのは、そ

のためです。具体的でないと言けない、具体的にイメージできたものを書いているのだと考えられます。人の話を聞く時、エピソードを身体に染み込ませていくような感じでした。

もちろん、取材に行くことが全くなかったというわけではありません。『四年三組のはた』の時には、執筆中に水天宮を見に行っています。また、晩年に近い頃の作品に『ぼくの学校ぼくひとり』（一九九九年 ポプラ社）があります。これは、ひとりだけの一年生をむかえて再開校した学校の記事を新聞で見て、取材に行きました。山梨県のけっこう不便な場所だったので、僕が車を出して一緒に行きました。その学校で話を聞いて、学校の中を見て歩いて、掲示物をメモしたりしました。詳しい話を聞くことができましたのですが、ある程度聞くと、「もういい、これで帰る」と言います。もうこれで書けると思ったのでしよう。たぶん、プロットというかストーリーが大体あって、その箱を埋めるために取材に行くのだと思います。箱を埋める具体的な要素が得られて箱がいっぱいになれば、それで書けるので「もういい」となります。この時の取材では、主人公となる子どもの家にも行きました。お父さんは、家具が何かを山の中で作っている人でした。

—— **集めたいものが先に決まっています、それを得るために取材することです。資料を集めて情報収集することもありましたか。**

小学一年生の春から夏を書くときには、『小一教育技術』を買ったり、小学館に閲覧に行ったりしていましたが、やはり必要な要素がそろえばよいという感じでした。この点は、同じく児童文学作家であるといえ、古田足日先生とは大いに違います。古田先生も同じように教育に関する資料などを集めて読まれますが、読むことがどんどん深まっています。「古田先生のようにやったら書けないよ」と母は言っていました。

—— **集めたいものが先に決まっていますという事は、テーマ先行型なのでしょうか。**

それとは違うと思います。母には好きな話というのがあって、そういう話を集めているという感じです。この話を母にしたらうけるだろうな、これは好きな話だろうなと思うことがありました。説明するのは難しいのですが、その話のポイントは、まずおもしろいこと、楽しいことです。それ

から人間関係が形成されていくこと、そして人が元気になっていくこと、人が変わることでしょいか。

好きな話を集めることに関してはアンテナが立っていました。「なんかいい話あった」と聞いてくることもありました。

—— **零点で（0てんに）乾杯というエピソードが何冊かの作品に出てきますが、これは好きな話なのですね。**

これは僕が一〇点を取った話がもとになっています。本当は一〇点で、零点はとっていません。母は、失敗のエピソードが好きでしたが、その人らしさが感じられるからでしょう。

一〇点を取って乾杯したのは、小学校一年生の学年末でした。三学期、理科の「かげ」の単元のテストです。母と父は、夕食のとき、本当に一〇点で乾杯してくれました。当時、僕は作文を毎日ノートに書いていて、このことも「十てんでかんばい」という題で作文に書いています。何冊もある僕の小学生時代の作文帳を母はずっと手元に置いていました。付箋などもはってありますので、母は創作に役立てていたのだと思います。

—— **この作文ですが、学校の指示ではなく、自主的に書いていたのですか。**

先生に提出して見てもらっていますけれども、自主的に始めたものです。最初は自分で書きたくて始めましたが、ある時期からこれを書かないと遊びに行つてはいけないということになりました。勉強しろと母に言われたことはあまりないのですけれども、作文は毎日書かないとだめということです。詩を書いてもいいんですけども、何も書くことがないというのと、「書くことがないということはない」と母は言います。「じゃあ相撲を取ろう」と言われたこともありましたが。それは相撲について書けということではなく、力を出すということでした。「自転車で一まわりしてきなさい」と言われたこともありましたが。自転車で一まわりしてきたら、何もなくて、家に帰ってみたら、この間まで部屋の真ん中で活躍していた扇風機が隅に押しやられていて、そこに埃がたまっていた、もう秋になっていたというのを書いたことがあります。僕の小学校低学年時代というのは、母が児童文学を書き始める直前の時期ですので、僕に作文を書かせることは母にとって、子どもの言葉とか子どもの論理とか子どもの感性とかを自分の

ものにするレッスンだったのでしよう。僕の作文に関して母が書いたエッセイ「綴ることにたすけられた子育て」（『作文と教育』一九九二年二月／「母からゆずられた前かけ」所収）では、そのように言っていないけれども。

なお、一〇点をとったのに零点をとったことになっているのは、物語だけでなくエッセイでも同じです。わかりやすくしているのだと思います。

——年譜によると、坪田譲治に初めて会うのは一九六三年とあり、これをきっかけとして児童文学創作を思い立ったのだと思っていました。宮川健郎さんの作文は一九六二年から始まっていますね。坪田譲治との出会い以前に、すでに書くことへの関心があつて、息子に作文を書かせていたということでしょうか。

一九五二年に壺井栄の『二十四の瞳』を読んで感動し、一九五三年に故郷を舞台とした作品「春駒」を書いて、壺井栄にその原稿を見てもらえないかと手紙を出していますから、書くことへの関心は早くからあつたということでしょう。ただし、その後は育児もありましたから、書き続けていたわけではありませんでした。

原稿用紙約二〇〇枚に清書された未発表作品の「春駒」は、紐で綴じられた形で残されています。最晩年に出てきたもので、実は、まだ読んでいないのですけれども。

——貴重なものが残っているんですね。目次を拝見すると師範学校の話もあり、『春駒のうた』（一九七一年 偕成社）とは別の自伝的小説のようですが、エピソードや表現などには重なりもあるように見受けられます。教育観の原点がここにあるのかもしれませんが、いつか全文を読ませていただければと思います。

未発表原稿「春駒」の存在は、あまり世に知られていません。今後、これをどのようにしていくかが課題だと思っています。

——『学校もの』の創作の背景をめぐって、ほかに何かご存知のことはありますか。

児童文学作品を発表し始めた頃、母は万年筆で原稿を書いていました

が、『四年三組のはた』（一九七五年 偕成社）から鉛筆になりました。課題図書にするから一週間で書いてほしいということだったからです。僕が大学生の頃でした。一週間分の食事を作っておいて、部屋にこもりきりで書きました。その間、病気の父の食事の世話は僕がしました。

この『四年三組のはた』の初版本については、挿絵に誤りがありました。物語に登場する校長先生は女性なのですが、挿絵は男性になっていて、それに編集者も気づかなかつたのです。

——当時、校長先生といえば男性だったからでしょうか。教育界の歴史を考える材料にもなりそうです。この女性の校長先生にはモデルがあるのでしょうか。

詳しくは知りませんが、若い頃に勤めた幼稚園の園長先生のイメージかもしれません。

四 宮川ひろと教育関係資料

——『先生のつうしんぼ』の「あとがき」に「雑誌『作文と教育』（百合出版発行）に発表された戸田唯巳先生のエッセーを「拝見しました」とあります。戸田唯巳氏の著作とはどのように出会ったのでしょうか。『作文と教育』を購読していましたか。

『作文と教育』は購読していません。戸田唯巳氏の文章は読んでいたことが確認できますが、最初どのようになさっかけて知ったのかはわかりません。遺された本の中に、戸田唯巳『子どもの目・子どもの芽』（一九八〇年 教育史料出版会）や『怒らないで書いて』（一九八二年 教育史料出版会）などがあります。後者には付箋が付いていて、興味を引いた部分があったことがわかります。

——『先生のつうしんぼ』の「あとがき」には、ほかに群馬県教職員組合発行の雑誌『文化労働』に掲載された「カイクの授業」の実践記録を参考していること記されています。雑誌『文化労働』は、所蔵している図書館もほとんどなく、入手が難しいもののようですが、このような雑誌との出会いについてはどうでしょうか。

群馬は故郷ですから、群馬県の教職員組合とは近い関係で、たびたび講演を頼まれていました。講演を通して、人とのつながりができ、雑誌や実践記録が送られてきています。『文化労働』なども送られてきたのでしよう。『作文ぐんま』（群馬作文の会機関誌）なども送られてきています。

ついでにいえば、母が購読していたのは、福音館書店から現在も刊行されている保育雑誌『母の友』です。一番古い号が一九六〇年一月号で一〇数年分のバックナンバーがいまも残っています。毎号の巻末に幼年童話がいくつものついでで、僕が小学校低学年の頃までは、よく読み聞かせをしてくれました。その頃、中川李枝子とか渡辺茂男とか、松谷みよ子、神沢利子、寺村輝夫といった作家がよく書いていました。母自身も、『母の友』に投稿して、選評で編集長の松居直さんにほめられたりしていました。一九六五年二月号の「読者の童話」のページに、母の童話「りすのたからもの」が掲載されています。

一九六〇年代に理論社から刊行されていた時期の児童詩の雑誌『きりん』も一時期購読していました。三年分くらいのバックナンバーがあったのですけれども、僕が二番めに勤めた大学の卒論ゼミの学生に貸したままになってしまいました。

—— 講演を通して現職教員の先生方とのつながりが生まれたのですね。講演は、よく行っていたのでしょうか。

一九七一年六月、四八歳の時に、高崎市立佐野小学校ではじめての講演をしてから、八八歳くらいまで、講演はかなり頻繁に行っていました。一九七四年、七五年くらいから回数が増え、多い年は一年に一五〇回以上も講演をしています。例えば、教科書会社の教育出版の企画で北海道を一週間キャラバンでまわり、昼は教育委員会主催の会に出て、夜は組合主催の会に出るといふ具合です。話すことは得意で、自分の作品に書いたことを紹介していき、講演の後には本を売っていました。母は語りの人で、そもそも作品の文章も語りがベース、話し言葉がベースでした。作品は、主語、述語が合わないようなことも多く、僕が随分ゲラで直したりしたものです。

講演を通して知り合った人から実践記録などがかなり送られてきてい

ました。もらった本や記録には目を通し、返事を書いていました。送られてきた資料の中から素材を得たこともあったはずですが、でも、母の死後、僕が使わないような資料はかなり処分してしまいました。

—— 教育関係の書籍や実践記録のほかにもどのような本をお持ちでしたか。

歌の本もありましたし、折り紙の本も、手遊びの本もありました。

—— 書籍・雑誌等から素材を得るときには、著者にことわっていたのですか。

もちろんそうしていました。本にも明記するようになっていましたし、著者にも自分で連絡していました。創作の参考にした文献をあとがきなどに記すことに関して、母の児童文学の師の一人である今西祐行先生は必要ないというお考えでしたが、僕は書いた方が良く、書くべきだと思います、母にもそのように言いました。母もそうすべきだと考えて本にきちんと記していました。逐一書いてありますから、素材に関する手がかりはあると思います。

—— 送られてきたり、創作に必要で入手したりした本のほかには、どのような本を読んでいらつしやいましたか。

必要があるもの以外には、あまり本は読まない人でした。読書家ではありませんでした。実践記録を読むのは好きでしたが、これは送られてきたものですね。返事を書くために読んでいたのだと思います。

小説などはそれほど読みませんでした。児童文学も、もらつて御礼の手紙を書かなければならないもの以外は読んでいませんでした。ただ、僕が、自分がおもしろいと思う本を読んであげることがありました。庄野潤三の作品集みたいなものです。一つ読んであげると、すごくおもしろいといつて聞きます。そこで、「じゃ、これ読んで」と本を預けるのですが、一週間か十日して「あれ読んだ」と尋ねると「読んでない」と答えます。「どうして読まないの、せっかく読んであげたのに」というと、「お前が読んでくれたところが一番おもしろそうだったから、他のところは読まなくていい」と言う。書き言葉は、読むのも書くのも、あまり得意ではなかったのでしょう。語るのと聞くのが好きでした。だから晩年、日本民話の会の仲間と一緒に昔話の「語り」をしていました。『わたしの昔かたり』

(二〇一二年 童話屋)というCDブックも刊行しています。これは、母のお通夜と葬儀の会場で流しました。

—— 先程、『ぼくの学校ぼくひとり』は、一年生をむかえて再開校した学校の記事を新聞で見て取材に行つて書いたというお話がありました。新聞はよく読んでいたのでしょうか。購読していたのは何ですか。

主に『朝日新聞』を購読していました。新聞はよく読んでいたと思います。社会問題や教育問題については、新聞から情報を得ていました。新聞の投稿欄は、特によく見ていました。子育ての悩みとか。

また、テレビは好きでした。晩年は健康番組などが好きで、ずっと見ていました。ワイドショーも好きでした。

—— 日常の中で、教育とか子どもをめぐる問題とかを話題にすることはありましたか。

普通に話題にしていましたね。今の子どもは、といった抽象的なことではなく、こういうことがあつておもしろかったとか、そういう話です。話をしながら、エピソードの「選別」をしていたのだと思います。話しておもしろかったら書けるし、おもしろくなかったら書けない、という感じに。ちよつとしたエピソードが好きでした。

—— 具体的な話から創作が展開していくのですか。

自分の中にほんやりと物語はあるようなのですが、そんなに物語づくりは得意ではなかったと思います。エピソードを並べて行つて、ようやく話ができるかできないか、というような感じでした。

—— 教育とはどのようなことを考える人ではありませんでした。ある種、全部語りなのでしょう。命題を立てて考えるということではなかったと思いますし、何か理想があつてそれを書くということもなかったと思います。ごく具体的な中に何か光っているものを見出していくという感じ。それが並べられていきます。

—— 先にテーマがあつたり言いたいことがあつたりして作っていく物語ではないということですか。

ないですね。どこかでテーマが生まれる、あるいは読んだ子どもたちのなかにテーマが生まれるということはあるのでしようけれども、テーマを

実現していくために書いていくということはありませんでした。「いい話ひとつ」(『民話の手帖』一九八五年 春号)、『母からゆずられた前かけ』(所収)というエッセイを書いています。それだと思えます。「いい話」を語りたいたいだけ。母にとつて「いい話」とは何かというところ、必ずしも抽象化できないのですけれども。でも、抽象化できたらどの話も同じになってしまうから、そう簡単にできないところが良いところなのだと思います。

五 宮川ひろの児童文学の特徴

—— 最後に、宮川ひろの児童文学、特に『学校もの』の特徴についてのお考えをお聞かせください。

『先生のつうしんば』などは、「先生のつうしんば」という言葉を発見した時に作品が一つの輪郭を持ったのだらうと思います。「先生のつうしんば」とか、「0でんにかんばい」とか、矛盾したことを言う傾向があります。弁証法的というか、零点とはつまらないことなのに、乾杯という喜ばしいことをぶつけてきて、矛盾しているその先に、正反合ではありませんが新しい世界があるという感じです。タイトルは割と上手でした。タイトルで勝負したというか、タイトルが世界を創つたというところがあつたのではないのでしょうか。タイトルというのは、ある種のアイデアですから、アイデアが新しい世界を創るといったことだともいえます。タイトルのいい本は、よく売れて、よく読まれました。

母の作品は、教育界に何かを主張しようというものではなかったと考えます。作品から読み取れるものがないとは言いませんけれども、意識的に主張しているわけではない。角度を変えた時に見えてくる現実を書いているのだと思います。

母は、「学校」を一つの「村」と見ようと思いました。これは、母の複数のエッセイなどにも書かれていた記憶がありますけれども、「学校」を「村」と見た時に、新しい学校観がひらかれたのでしよう。「村」と見れば、「学校」は子どもが管理され、評価される場から生活の場へとかわり、クラス

は一つの家になります。廊下は街道です。その意味で、母の「学校もの」は、根本的には『春駒のうた』と同じです。

「村」の中で語り伝えようとしたことは、「村」の知恵のようなものです。それは、教育とはこうあるべきとか、社会とはという主張・思想とは異なり、生きていく知恵として語られています。こうあるべきということではなく、こういうことがあるよ、こうやっていけば生きていけるよというよくなことだったのだと思います。

六 宮川ひろの児童文学と教育

今回、宮川健郎氏からは四時間近くお話を伺い、未発表原稿や宮川ひろの蔵書、写真などの資料も見せていただいた。《学校もの》の背景に関して、また創作方法に関して、貴重な情報が得られたが、それを簡潔に整理すると次のようになる。

第一に、宮川ひろの教職経験について、公開されている年譜や経歴からはわからなかった具体的な情報を得ることができた。「はじめて勤めたのは、母校でもある山の分校でした」とエッセイ「かたみのことば」（『この本だいたすき通信』一九九九年七月／『あて名のない手紙』所収）とあるが、それは一七歳の時、代用教員としての勤務だったということもわかった。児童文学創作を始めた後、教壇に立ったのは、一九六八年に産休補助教員として勤めた四カ月間だけだったことも確認できた。

第二に、エッセイの情報を正確な事実と考えてはいけないということが明らかになった。教職経験に関して、前掲のエッセイ「かたみのことば」には、最初に母校の分教場に勤めてから「一年がすぎようとしたとき」「もう一度上京してみたい思いをつのらせ」て、「父を一人残していく不安と、うしろめたさはありませんが、東京の採用試験を受けて、上京してきました」とある。しかし、実際には、出身地で代用教員として一年間勤めた後、上京して兄の家に寄宿し私立幼稚園に勤務、正教員免許状取得のための検定試験を各地で受けて、翌年、東京で正教員免許状を取得。その後、再び母校の分教場で半年ほど教鞭をとり、二〇歳の時に東京の国民学校に赴任している。息子がテ

ストで一〇点をとったという事実が零点と書きかえられたように、エッセイでは経歴もわかりやすく単純化されているのである。エッセイも創作として読みやすく整えられていることを意識する必要があると、インタビュアーを通して痛感した。

第三に、宮川ひろが講演会等を通して日本全国の多くの現職教員と知り合う機会を持っていたこと、その縁で実践記録や作文集等がかなり送られてきて、それに目を通していたことが判明した。学校やそこでの子どもたちの活動、あるいは子どもの行動と心理について具体的なエピソードを知る機会が日常的にあったと考えられる。宮川ひろの児童文学が現実を踏まえたものであることを確認することができた。

第四に、日常の場面でも、創作の際にも、宮川ひろは抽象的な思考が先に立つタイプではなかったこと、テーマが先にあるのではなく具体的なエピソードを連ねて作品は生まれていったことが明らかになった。意識的に思想を伝えるものではないという点は、作品を子どもも理解、教職理解の材料、教員養成の教材としてみた場合、利点となるだろう。

第五に、未発表原稿「春駒」や学童疎開日誌、宮川ひろによって付箋の貼られた本、創作の素材として活用された息子の作文帳など、宮川ひろの児童文学を考える際に貴重な手がかりとなるものが宮川家には数多くあることがわかった。学童疎開日誌は、宮川ひろの児童文学と教育の関わりを考える際の材料となるだろう。これらのものがいずれ研究資料として公的に保管されるようになるとういと考えた。文学研究の資料保存は、宮川ひろに限らず課題であろう。

以上五点、簡潔にまとめたが、いずれも宮川ひろの《学校もの》を教員養成に活用する際、作品の意味付けを行うにあたって有効な情報と認められる。同時にこれらは、宮川ひろの研究において必要な情報になると思われるが、それは言うまでもないことであろう。

おわりに

教育にかかわりをもつ話でありながらも、今回十分にまとめられなかった

のは、戦中を舞台とする《学校もの》の背景である。見せていただいた資料の中には、学童疎開時の引率日誌もあった。学童疎開を描いた『夜のかげぼろ』の「あとがき」に、「戦争はえがけなくても、疎開の生活を教室と違って、教室をえがくつもりで書くことにしました」とあるが、この一節の解釈について、宮川健郎氏の考えを伺うこともできた。宮川氏は、「社会とか戦争とか、大状況は書くことはできない。戦争という大状況はそのまま書けないけれども、戦争の中に確かに子どもたちがいて、その場所を書けば、また子どもたちが生きていた様子を書けば、教室を書くのと同じだから書ける、ということだろう」という。宮川ひろの戦争児童文学とその背景については、今後、教育の歴史を考える材料として活用する可能性も視野に入れて、情報の整理を進めたいと思う。

今回のインタビューを通して、宮川ひろの児童文学が現職教員の実践記録や子どもの作文などを素材としながら生み出されたことが確認できた。また、具体的なエピソードを重視する姿勢、「学校」を「村」と捉える独自の認識が見えてきた。宮川ひろの作品が子どもの現実や教室の事実を踏まえた具体性を持っていることは、教員養成に活用するにあたって重要な点であるといえよう。今後は、子どもの作文や授業実践記録そのものを読むことと、それを素材とする児童文学作品を読むこととの違いにも目を向けながら、児童文学を教員養成教育に活用するための方策を考えていきたい。

後記

初院校正後、宮川健郎氏から、宮川ひろが産休補助教員として勤務したのは一九六八年の四ヶ月だけではなかったかもしれないというお話があった。宮川ひろの第二エッセイ集『あて名のない手紙』（二〇〇七年 メディアパル）に収録されている「感動する心を育てる」に「私は何回か産休補助という立場で、教室へ出させてもらいました」という記述があるのを見つけたからとのことである。生前の宮川ひろへのインタビューをまとめて、健郎氏が編んだ未発表年譜には、産休補助教員としての勤務については一九六八年の四ヶ月が記されているのみであり、本稿の記述はそれに基づいたものとなって

いるが、この点に関しては、さらに調査が必要だと思われる。

【謝辞】末筆となりましたが、長時間にわたって宮川ひろの児童文学の背景と創作方法をめぐって詳しくお話くださるとともに、貴重な遺品をご披露くださり、伺ったお話をまとめることをご許可くださいました宮川健郎氏とご家族のご厚意に心より感謝し御礼申し上げます。